

## ICU キャンパスの自然

吉野輝雄（国際基督教大学教養学部教授）

今から37年前、ICUに着任しキャンパスを巡った時の驚きは今でも忘れられない。大学のキャンパスでありながら泰山荘の藁葺き屋根の山門をくぐると雑木林の中に「待合い」という茶室があった。そこから国分寺崖線（ハケ）を下って行くと湧水の小川が流れていて、もう大学の建物は全く視野に入っていない。かつてはワサビ田があったと聞き、さらに驚いた。幼少時代、浦和の田舎で小川や雑木林の中を走り回り、フナや虫を追いかけていた私は、自然に囲まれて仕事ができることがとても嬉しかった。

ICUには武蔵野の豊かな自然が残っていることが段々と分かって来た。キンラン、ギンラン、シロマルバスマシ、フデリンドウ、キツネノカミソリなど他ではめったに見られない野草が季節を告げてくれる。花の写真に興味としている私には堪らない所だ。これまで四季折々の野草、木の花々をどれだけ撮ったか分からない。ICU キャンパスには正門から続く桜並木、本館前の芝生の梅の木をはじめ敷地内には多様な樹木がある。その多くは植林のお陰だ。最近では、ナンジャモンジャ、アーモンド、オガタマなどの花も楽しめる。秋になるとデューク教授夫妻が残して下さった見事な紅葉が泰山荘付近を染める。このように ICU の自然は野生のものだけでなく、自然を愛する人達によって守られている。植物だけでなくキャンパスは野鳥や昆虫たちの楽園にもなっている。

桜見の季節には一般にも開放され、桜花のアーチをゆったりと歩く人達で溢れる。休日には、子ども連れのお母さんが広い芝生で遊んでいる。学内には門のない職員住宅が点在しているので保安と貴重な野草の保護対策が必要であるが、キャンパスの自然を市民と分かち合う機会がもっとあっても良いと思う。

ICUは2007年に環境宣言を作り、「ICUは、そのキャンパスにおいて比類なく美しい自然と貴重な文化遺産を擁している。ICUはこの環境を天恵の財として、その保全に責を負う」と表明した。新たな建築の前に動植物の調査と適切な処置を行うなど、ICUのこれからの姿勢と真価が問われることになるだろう。

Q (受講生) 「先生は、水／環境のために何をしていますか？」

A (吉野輝雄)

GEES (環境研究) 担当者として受講生からのこの質問に答えないわけにはいかないと、答えを考えた。

私の答えを一言で言えば、「自然と向かい合いながら今の生活を楽しんでいます」となる。これでは具体的に欠けると言われると思うので、以下にいくつかの節に分けて答えることにする。

### 1. 「自然と向かい合いながら今の生活を楽しむ」とは？

私は、自然の変化を見ていると生きる力が湧いてくる。ICU キャンパスの四季の変化は命の変化として目の前に展開されているので特に素晴らしい。毎日、大学の門から自転車に乗って理学館まで道の両側を見ながら走って来る。時々、チャペルの南側を通り泰山荘の前に出る道に向かい、遠回りする。道沿いに四季の草花を見るためである。早春のアマナ、コブシ、4月のスミレ、筆リンドウ、4月半ば過ぎになるとキンラン、大島桜が目に入って来る。5月になると新緑の樹木の葉が風にそよぎ、顔をなでる。私の一番好きな季節だ。身体の中を爽快に風が通り抜けていくようだ。これが自然の中で生活する日々の一部だ。

### 2. エコライフをしているのか？

- i) 仕事の性質上多量の紙を使う。キチンを情報を伝え、コミュニケーションを保つため必要な紙を使わなければならない。しかし、印刷ミスした紙はリサイクル箱に入れ、裏紙をメモ (研究／教育) 用に使っている。
- ii) エコバックもドイツで学んで以来使っている。ビニール袋は必要な時以外は断るようになっている。
- iii) ミネラルウォーターは値段 (水道水の 1500 倍) と「安全な水を万人に」という主義に合わないので買わないようになっている。浄水器 (約 3000 円) を付けた水道水を飲む (断っておくが、ボトル入りのお茶やジュースは別。また、旅行中は買う。) 飲んだ後の空ボトルは捨てずに、化学のデモ実験用に使う。
- iv) 水のムダ使いには気をつけている (常識として)。

### 3. 「水を巡る旅」は私の人生の楽しみとなっている。

各地の川、海、湖、滝、溪流、湧水、名水、池、運河、用水路、噴水、水車、水田、水を使った生活、料理など見所は限りなく、飽きることがない。巡れば巡るほど、見れば見るほど、人間との関わりを知れば知るほどに水の偉大さ、自然のしくみの不思議と恵みに魅せられてゆく。そのあらゆる情景を趣味のカメラを持って写真に収めたいと思っているので、目も足も動きっぱなしで、いつも快い疲れを感じながら、宿でゆっくりと休むことができる。

実は、水風景だけでなく、野の花の写真撮影が私と妻の趣味で、ICUの四季の花々、近隣のお宅の庭におじゃまして撮影させて頂いたりしている。旅の目的地も水か花か（もう一つ、灯台）のどれかを目安にして決めている。ほとんどの場合、それらは互いに対立することなく、満足させられている。共通項が、`自然、であり、自然の中の情景を撮影対象にしているからだ。

#### 4. 私も人間は自然の一部と考えている

私は、自然の中に逃げないことにしている。人間も自然の一部であり、自然との関わりの中で生の営みを続けているからである。現実には、自然を奴隷のように搾取し、人工物の材料として利用するだけの浅ましい情景を見ることがあるが、そこには自然の力と恵みへの畏敬も感謝もない。悲しい結末を想像し、悲しくなる。逆に、田畑の草を刈り、整地をし、水を引いて稲や作物を育て、山野菜や木の実を集めて旬の味を楽しみながら生活している田舎の風景を見ると、自然と共に生きている人の本来的なあり方を感じ、ほっとすることがある。もちろん自然の厳しさと対峙しながら生活している現実を忘れてはいない。にも拘わらず、である。

自然が異常な様相を見せた時には、まず人の力と思いを超えた自然の大きさの前に静まりたい。異常が何を示しているのかを考え、サイエンスの目でできるだけ客観的に理解するように努めたい。その答えが仮にすぐ出なくても、考え続け、自分が今いるところで人間としての分を弁え、自然に生かされている自分の生を全うして行く者でありたい。パスカルが言ったように、「人間は葦のように弱い存在だが、考える葦である」のだから、自然の中に置かれた者として考え続け、生を継いで行くことが本来的な使命（パスカルの言う道徳）のと考えるからだ。

#### 5. マイカーを持たない生活を楽しんでいる

私は生涯マイカーを持たないことにしている。ですからトヨタが赤字に転落しても、GMの経営が傾いても私の生活には関わりがない。とは言え、日本の経済・産業活動の動向とも関わりがないというわけではない。マイカーを持たない理由は、正直に告白するとエコライフを追求しているからではない。結果的には環境に優しい生活になっていると思うので、時代の流行の先端を行っているのかも知れない。繰り返すが、これは真実ではない。では真意は何なのか？実は、20代の後半に石油枯渇（エネルギー）の危機が大きな世論となっていた。その時、私に何ができるのか、考えさせられた。そこで私は、「マイカーは一人の人が使うエネルギーとしては多すぎる」と思い、「生涯、車を持たない生活スタイルを築こう」と決心したのである（若気の至り？）。つまり、エコライフではなく、省エネが動機であったのだ。以来30年間、バス、電車、自転車を使う生活を楽しんで来た。通勤、国内旅行を初め、アメリカ、ドイツでの長期滞在中も電車、バスをフルに活用し、「世界

の車窓から」のように車窓に見える景色と車内での出会いとウォーキングを堪能し、たくさんの忘れ難い思い出を残して来た。（誤解ないように言うと、私は車の合理性を否定するものではない、一人運転はエネルギーの使いすぎと考えている、車を持たない私は度々隣席に乗せて頂いて感謝をしている。）カーレスライフをエコ規範として主張する気もないが、そこには心躍る人生が待っていると自信をもって勧めることができる。あなたも不便さの楽しみを始めてみませんか？

#### 6. Think globally, act locally の現実とは？

私にとって local とはどこか？一日 12 時間以上を過ごす ICU であり、教育・研究の現実生活という答えが妥当であろう。そこで、環境（水）に対して責任ある地球市民として行動しているのか？と問われ、堂々と答えられればよいのだが、現実がいつもそうであるように計画／決心、失敗、一時停止、やり直し、小さな成功体験（自信の発見）・・・の繰り返しだ。要するに、現実の連続であるだけで模範となるようなものではない。与えられている場で、目を大きく開き、周り（環境）と生きた関係を持ちながらできることを実行して行くことが act locally であると考えている。

これでは答えになっていない？ それではもうちょっと具体的に述べよう。私の場合、Gen. Ed で「水を通して自然と人間について考える」をテーマに 20 年以上講義をして来たことは私の local action の一つと言える。クラスでは、水についての科学的知識を伝えるだけでなく、人間と水との関わりと水の本性を追究する中で培った自然認識の歴史、生命と水、人間生活と水との関わりについて語り、さらに、自然環境汚染や気候異変との関係、宇宙・生命誕生と水との関係を宇宙・地球創世にまで遡って考え、学生たちに今の時代をいかに生きていけばよいのかを考える機会をつくって来た。そこでは、単に言葉で答えるのではなく生き方に照らして考えるよう、私自身の生き方をかけて促して来たつもりである。

これが今、大学で教えている立場である者として global citizen の一人として私が実行している local action である。

皆さんのエコライフは？